

表1-1 阿蘇の草原タイプと管理方法 現状等

草原タイプ		管理方法	現状	植物(例)
短草型草原	放牧地	春4月ころから秋9月ころまで牛馬が放牧される。牛馬の摂食と踏圧のため草丈は伸びることができず、シバなどの丈の低い植物ばかりになる。	放牧牛の減少に伴い現在は放牧地でもシバ地にならずに草丈が伸びているところが多い。	シバ、トダシバ、ネザサ、ツクシゼリ、カワラマツバ、アキノキリンソウ、リンドウなど
長草型草原	採草地	<p>3月に野焼きが行われ、4月に入ると若草が芽吹き、夏から秋にかけてぐんぐんと草丈が伸び、9月中旬から10月下旬に刈り取られる(農家によっては6月～8月にかけて朝草刈りを行い牛に与えるところもあった)。刈り取られた草はその場で乾燥した後、「草小積」に積み上げられて冬の飼料となる。刈り取られた場所は燃える草がないので、翌春は野焼きの対象にはならない。また刈り取りにより草は根に栄養が貯まっていなくて、夏になっても草丈はあまり伸びない「古野」となる。古野は刈り取りの対象にはならないので、草は根に養分を蓄えることができる。そして次の年の春は木本類の侵入を防ぐため、野焼きが行われる。</p>	現在は採草の必要性が低下して、放棄地が増えている他、毎年野焼きだけをして刈り取りを行わないため茅野になりつつある所もある。	ススキ、ネザサ、トダシバ、ヤマハギ、カワラマツバ、ワラビ、チガヤ、オミナエシ、カワラナデシコ、タマボウキ、ケルリソウ、ヒロハトラノオ、ツクシマツモト、ヤツシロソウ、ハナシノブなど
	茅野	<p>ススキを収穫する目的で管理する草原。養分が地下部に移動して完全に木質化した地上部を正月過ぎに刈り取るので、翌年も大きく生長して他の植物を圧倒し、ススキの密生地となる。</p>	現在は茅葺きの家がほとんど無く茅野として利用する所はほとんどない。ただ、毎年野焼きだけをする結果、茅野と同じ状態になる所が増えている。	ススキなど
	湿地群落	<p>多雨地帯の阿蘇地域では、北外輪山の草原のくぼ地に小さな湿地が点在し、他のタイプの草原ではほとんど見ることのできない植物が多く生育している。阿蘇の植物相を特徴づける大陸系遺存植物が多いことも特徴である。放牧牛馬の水飲み場として利用価値があるため、もともとは周辺の草地と合わせて野焼きの対象として維持されてきた。</p>	かつては大規模な湿地が阿蘇谷に存在したが、圃場整備等で失われたり、草原管理の放棄によって遷移が進むなどで、現在は分布域が限られてきている。	チゴザサ、キセルアザミ、ヒメシダ、ヤマアゼスゲ、ハリコウガイゼキショウ、ツクシフウロ、ヒゴシオン、イブキトラノオ、リュウキンカなど
改良草地	<p>原野を改造して栄養価の高い牧草を育てる場所。単一の作物を捲いて育てるため「畑」の概念に近く、生物の多様性も低い。北米原産で低温でも育つ種が多く、春は早くから緑色になり、秋も遅くまで緑色をしている。ここでは放牧だけでなく採草も行われている。</p>	輪地切り省力のためにグリーンベルトとして造成する所も出てきている。	クローバー、オーチャードグラスなど	

参考文献：郷土の自然に親しむ 自然観察の手引き 平成11年3月 熊本自然環境研究会  
 阿蘇くじゅう国立公園草原植物調査研究報告書 平成5年3月 環境庁  
 「一の宮町史・自然と生き物の賛歌～動植物の四季 平成13年10月 一の宮町」